

インドライオンの行動的保定による採血

○大滝侑介¹⁾，小野香織^{1), 2)}，松本令以²⁾

(¹⁾ 横浜市立野毛山動物園，²⁾ 横浜市立よこはま動物園)

近年、さまざまな動物種で健康管理を目的としたハズバンダリートレーニング（以下、トレーニング）などが盛んに行われている。当園ではインドライオンの雄を1頭（2008年生まれ、人工哺育個体）飼育しており、行動的保定（トレーニング等により何らかの処置を行うために、動物を自発的に行動させること）をして、体重測定、前肢の爪切りを行っている。本発表では、新規に取り入れた行動的保定の導入から採血実施までの経過を報告する。

トレーニングの一次強化の強化子には約3cm角に切った馬肉、二次強化には犬笛を使用し、必要に応じハンドサイン、ターゲットバーを用いた。トレーニングの頻度は週に3~4日、1日1~2回、1回約5~15分、給餌量は500~2000gで行った。採血のトレーニングは2015年4月より開始した。始めにハンドサインによる伏臥位姿勢の強化をした。次にターゲットバーを用い檻沿いに採血地点へ誘導した。採血地点にてターゲットバーへ鼻部を触れさせ、触れたら犬笛を吹き強化子を与えこの行為を繰り返すと同時に尾に触れる脱感作を行った。

採血はトレーニングを開始してから7か月後の2015年11月に行った。採血は給餌者、採血者の2名（必要に応じ尾の保持者を追加した）で、施設既存の給餌口より尾を出し外側尾静脈から26G×1/2SB針、1.0mlシリンジを用いて行った。

今後、安定的採血を行い、採血で得られたデータを蓄積し個体の健康管理に役立てるとともに、血液を有効活用できる研究にも取り組んでいきたい。